

・2つの復活物語

ヨハネによる福音書第21章は、「後代の付加」と考えられています。ヨハネ第20章で、主イエスが弟子たちに現れてくださったのに、再び場所をティベリアス湖に変え、また現れる。弟子たちは主だと気付かない。20章を読んだ方で、21章も読むと、また復活の話か？どちらが正しいのか？などと勘ぐってしまうのではないのでしょうか？

どちらか一方が正しい？という捉え方は、どちらかが間違っているという考え方を生みだします。そして一方を意味や価値のないものと、断定し、裁きにつながっていきます。これは、わたしたちの生き方そのものにも表れることです。正に今、そうした連続に生きていることを皆が感じていると思います。これは正しい、これは間違っている、という声に溢れています。しかし、私たち人間の生は、そんなに単純ではない。生きるということは、あれか、これかで生きられないことの多さに、時には矛盾を抱えながら生きていくことの連続ではないか、と思うのです。

聖書は、その始まり。旧約聖書の創世記における、「天地創造」においても、1章から2章4節の前半までの話と、4節から始まる話、2つの物語が語られています。信仰の書物なのだから、正典なのだから、2つもあってはよろしくない、と言うのではなく、聖書は私たち人間を、そのあり方からよく映し出しているように思うのです。どちらが正しい、どちらが間違っているという私たちの思考の縛りは解放される福音。よく目を凝らし、耳をすませ、心に向け、どちらも、神さまから、ここにいる私に向けたメッセージがある。グッドニュースがある。それをヨハネ第21章は、発しているように思うのです。

・様々な弟子が・・・

20章においても、21章においても、場所はちがいますが、弟子たちが集まっていたのです。この2つの復活物語には、共通点があります。それは、弟子の皆が集まっていたということではないということです。20章においては、主イエスの復活した週の初めの日に、トマスがそこにおりませんでした。翌週にようやく主イエスとの再会を果たしました。そして21章においては、7人が集まり、主イエスの弟子としての姿でと言うよりかは、生活の資を得るために、湖で漁をしていました。主イエスの弟子の中には、漁師だった者がいました。主イエスの十字架の死を受け、彼らは、弟子として生きるのではなく、漁師に戻り、生活を続けることを選んだのです。それに付いていった者たちがおり、また一方でついていかなかった者たちがいたのです。裏切ったユダを除き、11人の弟子の中で、7人がいました。他の4人については触れられていません。どこにいて、何をしていたのか、記されていません。弟子たち全てに様々な選びがあったであろう、ということが想像できます。

現在、これはコロナの副産物と言えるのでしょうか。様々な教会で、様々な形式でのオンライン礼拝が始まっています。瑞穂教会でも、今この時間に、ライブ礼拝というかたちで、YouTubeを通して礼拝を献げている方がいます。先週、連盟の公開した会議も、オンラインで行い初体験してみました。今週の火曜日にも中部連合の牧師有志が集まってみようと、話があがっています。集まることへの制限がある中で、尚できることがあるのだと気付かされます。他教会のオンライン礼拝を通じて、いろんな声を聞きます。他教会の奏楽が大変参考になる。どこどこ教会の牧師の説教が

いい。あの教会の礼拝は魅力的だ、などなど。こうした声は主に信徒の方からのものですが、オンライン礼拝が進む中で、牧師にも大きく2種類のタイプがいることを感じています。ネットで世界中にメッセージが配信されることに、「どうぞ聞いて下さい。」と胸を張って言えるタイプの方。もう一方は、「自分の説教が世に晒されるなんて、果たして聞いている人がいるのだろうか?」と、自虐的に感じながら臨んでいる方。私がどちらに属しているかは、想像にお任せしますが、瑞穂教会のオンラインでの礼拝、ライブ礼拝を献げている方の中には、「秋山牧師のメッセージが聴けて、本当に恵まれています」と、励ましの言葉を下さる希有な方がいてくださる一方で、より多くの方から届く声は、ライブ礼拝で、今日一歳になる、私の次男の元気な声が響いて、成長を感じられて本当に嬉しいというものです。「来週は、彼がメッセージをします」と言った方がよいでしょうか…

話が脱線しましたが、いろんな思いの方がいて、それを表す自由がある。それが人間です。弟子たちも、ただの人間です。イエスが復活した、などと誰も思えなかった。それでも集まった人もいれば、集まらなかった人もいた。今日、この時も様々な理由で、礼拝することができない人もいるでしょう。仕事がある。家族のことがある。コロナのことで、もしかすると、全く別のことで、心が向かない、他のことでいっぱいいっぱい、生活のことや将来のことで、不安がある。主イエスを思う事などできない、そういうところにある方がいることを思います。

でも、主イエスはその弟子たち、集まっていたけれど、礼拝するでもなく、主イエスを待つでもなく、漁師として生き始めていた、生活するために一生懸命であった、その彼らのところにおいてになったのです。弟子として生きなくてはいけない、とたしなめたわけではありません。そこにいる、一人ひとりと再会され、そして必要とされたのです。私たちも、今、すべての人が共に集えない、同じ場所にいることが適わない、そうしたことに憂いを覚えます。終息がいつになるか…また感染の波がやって来るのか…早く終息して欲しいという祈り願いと共に、長丁場になりそうだという思いも持ち得ています。もう教会に、礼拝に、元のように集えないかもしれない。そうした不安を、私も抱えています。しかし、今日、主イエスが、それぞれのところにある弟子たちを覚え、主だと気付かないその一人ひとりを覚え、出会いに来て下さったことに深い慰めを覚えるのです。

「恵みが、変わらぬ愛をもってわたしたちの主イエス・キリストを愛する、すべての人と共にあるように。」(エフェソ6:24)

「神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。」(Iコリント12:28)

こうした御言葉がより広い視座で、広い心で受け止められていくのです。その主の思いの中で、私たちも、様々な思いの中にある他者が、一人ひとりが私の人生に本当に必要で、私たちの共同体において大切だということを感じたいのです。

・何も取れない夜がある(3節)

弟子たちは、夜な夜な漁をしていました。やってもやっても、成果が出ない。やろうとしても、上手くいかない。自分の力ではどうしようもない、そうしたことを空の網、空の舟を見ながら、切に感じていたでしょう。何も取ることでできない夜がある。落胆と、疲労だけが自分を覆うようなそうした夜がある。皆さんの人生の中にも、そうした出来事があるのではないのでしょうか。今がそうです。という人がいるかもしれません。これまで、そうしたことの連続でした、という方がいるかもしれません。

主イエスは、その落胆し、疲労困憊の夜明けに、弟子たちの前に立ち、待っておられました。そしてその朝に、語りかけてくださるのです。「子たちよ、何か食べ物はあるか?」。弟子たちは主イエスだと分からなかったのです。そして見るからに自分たちは疲労困憊なわけです。何も取れないのは、見ればわかるでしょう、と思ったに違いありません。「ありません」(5節)とありますが、これはもっと強い「否!」「ないよ!」「ないに決まっている!」という言葉に訳せるところです。落胆し、疲労がたまっている上に、更に否定的で悲観的なことを言われると、考えることもおっくうになります。ぶっきらぼうに、答える、自然体の弟子たちがいます。

その疲れ果てていた弟子たちに、主イエスはもう一度、舟にのり、網を降ろすように、言いました。少し休んでからで、いいじゃないか! 散々チャレンジしたのだから、今日はそういう日なんだ、無理だよ、私がそこにいたら、きっとそう思うと思います。しかし、どういう思いがあったにせよ、彼ら弟子たちは、そこで、再び体をおこし、網をもち、舟をこぎ出しました。その出来事は、主イエスが彼らを弟子として招いた時と、同じでした。(ルカ5:1~11)「お言葉ですから」と、その時せいっぱいを信じ、受け止められるだけの思いで、主イエスの言葉に従ったのです。そして、彼らは網がちぎれんばかりの沢山の魚を獲ったのです。その時、彼らは「主だ」と気付いたのです。ペトロは裸でした。漁をする時のスタンダードの恰好でした。しかし、実は、愛する主イエスが復活し、自分たちに会いに来られたこと。落胆する自分たちに、希望の朝を迎えさせてくれた感謝から、服を着て、急いで岸まで会いに、泳いでいったのです。主だと分かる前も、分かった後も、いろんな弟子たちがいます。それぞれに主イエスを慕い、それを言い表しています。主イエスは「なぜ分からなかったのか」と言われません。彼らをひたすら待ち、共に朝を、朝食の時を過ごしてください。岸において、食卓を整えて、待っていてくださるのです。共に食べ、共に生きようとの思いを表してください。私の好きな聖句の1つ、詩編第30編6節にこうあります。

「泣きながら夜を過ごす人にも、喜びと共に朝を迎えさせてくださる。」その主体が神であり、イエス・キリストです。落胆する夜が、確かに皆あるのです。しかし、一緒にその朝を迎えてくださる。落胆で終わらない、希望を与えてくださるのです。今、教会は大切にしてきた交わりの一つ、食事。礼拝における主の晩餐式、昼食の愛さんをお休みしています。なくなってみて、本当に大切に、かけがえのない時だったと振り返ります。しかし、主イエスが用意してくださる時が、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言ってくださり、魚とパンを分けて、共にいただくその日が必ずきます。一緒に待ち望みたいと思います。

・153匹のイミ

最後に、弟子たちが獲った魚の数について話します。その数は153匹だったとあります。この数字のイミは、今もなお諸説あります。魚は、その当時の世界にあった魚の全種類であり、世界中の人たちが皆、イエスによって救われ、信じる先取りの数字という解釈や、ヨハネ福音書が編まれた当時あった教会の数で、世界中の教会を祝福しているという解釈など。割ったり、足したり、あーだこーだ言いながら、いろんな人が意味づけを行ってきました。しかし、今日、私が皆さんと分かち合いたい、福音の数字とは、それは、1の位まで精確である、ということです。153にイミは特になく、ここに約150とか、大体100とか、ではなく、「153」と、一匹ももれることなく、アバウトにされることなう記されている、ということなのだと思うのです。

2か月前の、2・11信教の自由を覚える日の集会に、私は参加しました。そこで、従軍慰安婦の問題を、特に日韓の戦争の歴史とその後の和解について焦点を当てて被害者救済に取り組んでい

る梁澄子先生から、講演と学びの時が与えられました。特に印象に残ったのは、日本は、謝罪したかどうか、したんだから、それでもういいじゃないか、水に流しましょうという、被害者の思いを聴く前に謝罪を終わらしてしまうという課題を挙げてくださったことです。続いて先生はドイツのことを紹介してくださいました。ドイツも第二次世界大戦の際、多くの国やユダヤ人に対して、侵略し、虐殺を行いました。戦後 70 年以上経った今も尚、侵略し、攻撃した国々、人々、その村々に対して、記念式典に加害者として赴き、この村では〇〇人、ドイツの攻撃によって、亡くなった、と数字をはっきり述べ、もうこのようなことを起こさないという決意の言葉を述べ続けているとのこと。先生は、韓国の式典に日本の代表はきたことがないことを挙げ、その違いを明らかにしてくださいました。

今日の巻頭言にも世界とのつながりについて書きましたが、今コロナのことで、私たちが学び続ける者としていただく恵みの一つに、世界中の指導者が今、何を大切にし、国民をどう捉え、国を、国家予算を動かしているのか、ということを知ることが出来る、ということです。ドイツのメルケル首相の演説が、ドイツ領事館の HP で翻訳されており、拝見するとよく分かるのですが、自分の言葉で、国民ひとりひとりを信頼し、まるで対面しながらのように語っている印象を受けます。「デマに流されないで」という言葉に添えて、「様々な言語に政府の言葉を翻訳していくので、信頼して欲しい」と伝えていきます。これは、海外から移住している人々、難民や移民の方々にとって、本当に心強い言葉だと感じました。ドイツ人だけでなく、こうした外国出身の人々も含めて、生活保障として、日本円にして約 60 万円が迅速に支給されたというニュースも入ってきています。演説の中では、スーパーのレジの人たちへの配慮、労りの言葉もあります。聴いた人は自分を覚えてもらっている、一人が大事にされている、と感じることでしょう。そして政府が強制的に隔離政策を取っていることを、自身の東西ドイツ分裂で、行き来が自由にできなかった経験から、本来あってはいけないと語りつつ、誠心誠意お願いをしているのです。彼女の父親は東ドイツで牧師をしていた方で、メルケル首相もクリスチャンであり、信仰を表明しています。このように自分の言葉で語り、また一人ひとりを大切にしている政策を今、取れるのは、先に紹介した、「〇〇人を戦争で失わせた」という数字への重みを、国として大事にしてきているからだと感じています。

私たちが日々の生活の中で、今日は〇〇人が感染。〇〇人が死亡、との悲痛な数の現実を突きつけられています。日常の中で、その数字を目にしてももうあまり驚かなくなっている自分があるな、と感じます。そこに 1 人の死が何回あったと考えると、つらいのです。心がどんどんと疲れてしまうのです。だから考えないようにしている、という面もあります。でもこの数字を、大事にしたいと思うのです。東日本大震災から、毎年〇〇年を数える祈りを、日本バプテスト連盟諸教会で覚えて続けています。そこには、あの時なくなった人の数、今尚行方不明になった人の数、避難を続けている人の数が述べられています。私たちが、そこで被災し、亡くなり、痛み、見送ったすべての人の背景、思いに至ることはできません。でも、1 名の単位に至るまで、その数を大事にしたいのです。そして、私たちがたとえその全ての人の思いがわからなくても、153 匹、主なる神様が一人も漏らさずに、主イエスが 100 匹の内の 1 匹が迷子になった時に、探し続ける神の思いを語り、その思いの中で十字架につけられたように、神が覚えて下さる一人ひとりとして、一の位に至るまで、その数字を大切にしたいのです。

今日、主イエスが一緒に礼拝している一人ひとりを覚えてくださっている。今日、働いてくださっている一人ひとりを覚えてくださっている。働くことも、礼拝することもできない、その一人を覚えてくださっている。その神さまに信頼して、新しい一週も私たちは祈り続けていきましょう。